

藤田浩子の 少し昔のこと 〈106〉

井戸

地下には水脈があり、そこを掘り当てれば井戸が作れました。地上の水脈が川ですから、川から水を引くこともありました。井戸を掘らなくても地下からこんこんと水が湧き出る湧水や清水もありました。日本は水の豊富な国ですから、水はいくらでもタダで使えました。たいていの集落には井戸があって、その近辺の人たちが共同で使っていましたから、井戸には主婦が集まり、おしゃべりに花が咲きます。それを井戸端会議といいました。

各家庭に水道が引かれるようになって、井戸端や川で洗濯をしたり野菜を洗ったりすることがなくなってしまったら、井戸端会議という主婦のおしゃべりの場もなくなり「井戸端会議」は死語になりました。

いまにして思えば、井戸端



会議は主婦たちの大事なストレス解消の場でもあったし、先輩主婦から夫の操縦法や、世の中のしきたりを教わり、子育ての知恵を聞く場でもありました。

時には料理教室になって、漬物の漬け方から味噌の作り方まで教わる場でもあったようです。私も子どものときは井戸生活でしたけれど、結婚してから住んだ福島市は水道になっていました。都市水道の届かない田舎では、自宅の井戸から水道管で台所に井戸水を引いてくるという家庭もあったようですが、いずれにしても「井戸端会議」は死語になってしまいました。

井戸生活のときには、台所の大きな甕に、いつも水をためておきました。お風呂を沸かす日には風呂桶いっぱいの水を井戸から汲んでこなければなりません。水汲みは兄たちの仕事でしたけれど、重労働だったと思います。水汲みが重労働でしたから、おばちゃんたちは水を台所に運ぶのではなく、衣類も食器も野菜も、洗い物を全て持って井戸に集まったのでしょ。その井戸がだれの井戸であろうと、水は使い放題でした。

リレー連載 <236>

わたしの大好きな絵本

渡辺さおり（こぼとこども園）

歌や絵本に出てくる猿のイメージは大体が食いしん坊でズル賢くてすばしっこい。この絵本の主人公のお猿さんもそのままのキャラクター。りんごがひとつだけ落ちていた。お腹を空かしている動物達は皆んな食べたい。それを小さなお猿さんがサッと奪ってしまってみんな大慌て。木から木へ逃げ、川を渡り、崖まで追い詰める。皆んな怒って脅かし、怖くなったお猿さんはとうとう崖から飛び降りてしまう・・・フリをして崖の途中に隠れたら、動物達は諦めて帰ってしまう・・・フリをして追い詰める。皆んなが近づいてお猿さんの腕を見て

『りんごがひとつ』

作・絵： ふくだすぐる

出版社： 岩崎書店

みると、りんごと一緒に赤ちゃん2匹抱えていた。

申し訳なさそうにりんごを返そうと差し出してお猿さんを置いて、「やれやれ」と帰って行く動物達でした。子供が描いたような可愛らしい絵とたった一つのりんごを巡って追いかけてこ。

赤ちゃんに食べさせる為にりんごを奪って逃げたという、題名からは想像がつかないようなオチがとても忘れられない絵本です。

